



「定量的」な客観的重症度評価に基づいた 新しい蘇生後ケアの開発

演者

新潟大学大学院医歯学総合研究科
救命救急医学分野 教授

西山 慶 先生

2002年、蘇生後において低温域 TTM (32-34°C) が神経学的転帰を改善することが示され、現在ガイドラインでは低温域 TTM が推奨されている。

しかし、その後の介入試験には低温域 TTM が有効である研究 (HYPERION 試験) と有効でない研究 (TTM 試験、TTM2 試験) が混在し、臨床現場に混乱が生じている。

これらの研究群を俯瞰すると、さまざまな神経学的転帰を認め、さまざまな介入温度で実施されている。このことは、蘇生後脳症重症度評価法が未発達であるため、実際にはそれぞれの患者の重症度が大きく異なる研究群を比較していることを示唆している。また、大規模試験ほど有効性を認めていないことから、患者の重症度が様々なため生じた β エラーも懸念されている。

このように、蘇生後脳症の重症度評価に基づいた脳障害の重症度に基づく新しい蘇生後ケアの創造が求められているが、その中で最も重要なことは蘇生後脳症における「定量的」な評価法の開発である。現在、世界中の研究者が、蘇生後脳症重症度「定量化」に向けて研究を開始しており、本邦においても重症度スコアに基づいた蘇生後ケアの介入研究が開始となっている。

本セッションでは、新しい「定量的」な蘇生後脳症の重症度評価法とそれに基づいた新しい蘇生後ケアの開発について議論していきたい。